



AA日本ニュースレター

NPO法人AA日本ゼネラルサービス (J S O)

No. 122

第12回全国評議会

2007年2月10日～12日、川崎グランドホテルにおいて第12回全国評議会が開催されました。最初に、今年もまたグループの皆様の献金によって、全国評議会を無事開催することが出来たことを心よりお礼申し上げます。

さて、第12回全国評議会のテーマは「私たちの本来の目的～手にした一冊の本」で、後期評議員の皆さんがレポートを書き、地域の現状と共に分かち合いを行ないました。また、レポート報告の後半を使って「評議員が選出されない現状」についての分かち合いも行なわれました。昨年以上に今回は、各地域とも評議員を選出することが難しいという状況がありました。そんな中でぎりぎりの段階までなんとか評議員を選出しようと努力なさった地域もありましたことをお伝えしておきたいと思います。こうした分かち合いが今後の評議員選出につながってくれることを心から祈っています。

では、ここから第12回全国評議会にて採択されたことを、紙面の許す限りお伝えしましょう。

議事委員会

来年のテーマは？「私たちの責任（出あい～手渡すもの）」。
このテーマは今回から「来年の評議会までの行動テーマ」となります。この1年間評議会構成メンバーは、このテーマをもとに活動することになります。

日程は？2008年2月9日～11日に決定しました。

場所は？今年と同様「川崎グランドホテル」です。

また今回の評議会では大きなことがいくつか決まりました。

企画委員会

トピック1！AA日本35周年の開催。場所は中部北陸地域！
35周年の開催が議題として挙げられていましたが、それと共に開催地の立候補も出ていたため、開催地も含めて決定されました。2010年は皆さん中部北陸に集まりましょう！

トピック2！評議会憲章施行！常任理事会準則施行！

長い時間をかけて検討に検討が重ねられて来た評議会憲章と常任理事会準則がよくやく本格的に採択されました。この決定によって、AA日本評議会はようやく自分達の憲章と準則を手にすることが出来ました。

広報・病院施設委員会

今年の広報・病院施設フォーラムは大大分県別府市で開催されます。

立候補地があったため、そのまま採択されました。また来年度以降の広報・病院施設フォーラムについて将来的なビジョンを明確にするよう常任理事会に勧告がなされました。

メンバーシップサーベイを実施します。

今年は情報収集とその集計を行ない、来年リーフレットを発行します。

英語版ホームページの作成を準備します。

年々ニーズが増加している英語版のホームページ作成が勧告されました。

全国矯正施設フォーラムを開催します。

これは当初予定になかったものですが、評議員の強い要望により開催が決定したものです。開催地を6月末まで公募いたします。

出版委員会

今年は特に主だった決定はなされませんでした。「文庫版12のステップと12の伝統」の出版は、継続審議となっています。

財務委員会

財務担当理事から「各地域に伝統7委員会を設置することと、献金フォーラムの実施をお願いする」提案がなされ、承認されました。

国際協力委員会

昨年採択されたAOSM日本開催ですが、開催地と日程が報告されました。

日程は7月6～8日で、場所は埼玉県嵐山の国立女性教育会館です。

まだまだたくさんあるのですが、以上のような採択を行ない、今年の前算を¥43,299,300（端数調整）と決定いたしました。

審議の中では採択されなかった事項もありました。また、入念な審議の結果継続審議という結果に至ったものもあります。こうした決定を2泊3日という短い時間で審議することは大変な集中力と個々のステップが必要とされる場面だと思えます。評議員の皆様と常任理事会の皆様、本当にお疲れ様でした。また、物を語らずひたむきに記録を採るという形で貢献して下さった書記の皆さん、そして、爽やかな笑顔で受付に座って下さった方々、そうした事務局ボランティアの皆様にもこの場を借りて心からお礼申し上げます。

これから各地で報告会が始まることと思いますが、評議員は皆さんの質問を心待ちにしていることと思います。どうぞたくさん質問を投げかけてあげてくださいね。

評議会事務局長・水谷



AAの全国「矯正・保護施設メッセージ・フォーラム」の開催に寄せて

荒木龍彦(甲府保護観察所長)

1 今、刑事司法機関へのAAからの働きかけが活発になっている。AAというのは、アルコール依存症の人々が回復を図るために集う自助グループである(AAは、Alcoholics Anonymousの頭文字で、匿名断酒連盟などと訳されることがある)。AAの日本本部であるJSOは、平成6年5月にニュージーランドのメンバーを招いて東京で会議を開き、受刑中又は保護観察中であるアルコール問題対象者にメッセージを運ぶ(AAのプログラムによって回復を図ることを呼びかける)活動を行っていきこうと話合ったことがある。以来、AAは、途絶えることなく関係機関との協議を続け、各地の刑務所、更生保護施設へと活動の場を広げてきた。諸外国のように矯正施設へのメッセージ活動を常態化したいというAAの方々の思いからであった。平成6年以前にもAAのメンバーが矯正施設や更生保護施設を継続的に訪問した例は数多くの施設であった。しかし、施設側、メンバーの側いずれかの事情で中断する 경우가多かったのである。それ以後に矯正施設委員会が立ち上げられてからの経過をみると、メッセージ活動は以前に比べ安定して行なわれるようになった(中断に至ったところも会議に参加して改めて取り組もうという意向を示したりしている。)

AAは、関係機関で関わりのある職員を「AAの友人」と呼んでいるが、私はAAを「更生保護の友人」と呼んでいる。更生保護の分野にとどまらず司法の領域全般でAAの果たす役割に期待するところは大きい。

2 今年8月、東京で第5回のAA矯正施設パブリック・ミーティングが開催された。矯正施設委員会が主催するもので、横浜、東京、千葉、埼玉の順に首都圏に会場を求め、矯正保護の機関や医療福祉関係者を招いて100人ほどの参加者で協議を行っているのである。

関係者の話に混じって矯正施設入所経験者などによる回復の体験談もある。そこでは、制御できない行動、習慣から服役と釈放を繰り返した人が、AAのプログラムと支えあう仲間に出会うことによってその後何年にもわたって犯罪とは無縁の生活を送っている姿を見ることができる。前回までの会議に登場し体験を述べた人が、一年を経て一層頼もしい発言をされることに感動させられたり、また別の体験を述べる方が新たに何人も現れることに驚かされたりする。年々人の厚みが増すのを感じる集会である。

3 AAの日常のプログラムの中心は、地区ごとにグループを作り、夜7時から90分ほどの時間、公的な集会所や教会を借りるなどして行われるミーティングである。自己を披露し、他のメンバーの体験を聞いて、自分自身を見つめ将来の見通しを持つのである。

私がAAのミーティングに見学のため初めて参加したのは、16年ほど前である。オープン・ミーティングといい、当事者だけではなく、関係者の参加も認められるミーティングである。突然訪問した私を意に介する風でもなく、時間がくるとメンバーの方々は、原則を確認する文章の朗読、唱和から始めて、自分自身の赤裸々な体験やそれにまつわる思いを順に語っていった。

私も最後に発言を求められたので、簡単に自己紹介をした。終了後、一人のメンバーが握手をして歓迎してくれた。数度の服役経験の後にAAにつながり、その後犯罪から遠ざかって8年が過ぎた人であった。その人に見事な変化をもたらしたAAとの出会いは、私の頭の中で長くもやもやしていたものに風穴をあける鮮烈な

ものであった。

思えば、保護観察官という職業は、犯罪を繰り返す人々について真に回復・更生した例を見る機会に乏しい。仮釈放者についてみると、平均4、5か月で満期を迎えて我々の前から立ち去るから、仮釈放期間を無事に経過すればよしと思うしかない。しかし、実際には、4割の仮釈放者は、釈放から5年目までに再度服役している。私たちが何年かして、再びその対象者と出会うとすれば、どれも失敗(即ち再犯して)して新たな処分を受けてきた者ばかりである。その片側の5年を経て再犯しなくなった人たちが、なぜそのような経過を辿りえたのかを検証して成功(回復・更生)のイメージをつかむ機会が乏しかったのである(長期の安定期間を経て再犯をしたケースとか恩赦の対象として調査するといった限られた例はある)。

保護観察対象者と出会ったとき、自分なりにその人の更生への希望のシナリオを持つことが重要であるとすれば、AAで歩みを変えた人々をみることは、その一つの可能性をもたらしてくれるものである。その意味でもAAとの出会いは一層衝撃的であり、また嬉しいものであった。

その後、保護観察所で幾人もの対象者にAAのプログラムへの参加を促し、歩みの劇的な転換を夢見た。AAの方法で運営するデイケア施設の施設長さんにも何度も観察所に足を運んでもらい、対象者に会ってもらった。結果は必ずしも思うようにいくものではなかったが、中にはAAに続けて通うようになって、歩みの道筋をかえることができた人も現れた。東京に、AAとも手を携えながら、飲酒の問題を持って犯罪を繰り返す人々の回復・更生を本格的に援助する更生保護施設もでき、その施設を巣立った人たちがAAに手記を残すようなこともあった。

AAに触発されたのは、対象者に与えるプログラムの力ばかりによるものではない。かつて自分自身が味わったのと同じ苦しみにあえぐ「仲間」たちに、ひたむきに関わろうとするAAメンバーの方々の姿勢に、私たち自身の努力も励まされることが多かったのである。同様の思いでアルコールに問題がある人々の回復を援助する医療、福祉関係者も多数おられ、その方々との連携からも多くのものを学んだ。

4 AAの矯正施設委員会は、打合せ会議である委員会を毎月開いて矯正・保護施設へのメッセージの運び方について検討をしている。つい最近から全国の保護観察所にAAの機関誌が送られるようになった。前述の過去5回の矯正施設フォーラムは、「関東・甲信越」を範囲とする活動であったが、いよいよこの12月には、全国の「AA矯正・保護施設メッセージ・フォーラム」が、法務省所管部局の出席も招いて開催されることになった(16・17日・中野サンプラザホール)。矯正施設委員会の方々の一つの到達点であり、また新たな出発点となるのであろう。

課題も多い。AAのメッセージ活動は、アルコール問題をもつ犯罪前歴者を更生へと挫折なく単線的に向かわせるものではない。本人が問題も対処の必要性も認めないことも多く、AAのプログラムを理解し、メンバーを仲間と感じるまでには時間を要する。そこでは、彼らとAAをつなぐ、施設・機関職員の側の指導のノウハウの蓄積も必要である。

また、矯正・保護の施設に収容される対象者は、アルコール問題をもつ犯罪前歴者の一部に過ぎない。それは、遅きに失した「一部」であるとも言え、それ以前の被疑段階、被告段階の人たちへとメッセージが裾野を広げて運ばれることも必要な方向である。このように考えると、AAが日本の刑事司法機関の中に十分に根づくには、まだまだ多くの時間を要すると思う。

それでもその歩みをともにすることによって我々刑事司法の機関が得ていくものは、この種対象者の処遇という範囲を越えて幅広いものになると思っている。アルコール問題に根ざしたもの以外にも

病的な窃盗、習慣的な性犯罪等々、慢性疾患のように繰り返される犯罪が多様であることはいうまでもないが、その一つひとつと取り組むに当たって、アルコール依存症からの回復を図る公的機関やAAとの連携の実績は一つのモデルとして機能し、解決への道筋を描いてくれると思うからである。AAから刑事司法機関への活発な働きかけを幸いな機会として、刑事司法各機関がAAとの連携に応えることは、刑事政策の全体にも波及する意味として大きいと思う。

5 AAは、104の電話番号案内で連絡先がわかる。「AA」というだけで、日本事務所の番号がわかる。そこから地方ごとの事務所に電話ができて、最寄りのミーティングの開催場所と時刻がわかる。パンフレットを渡しても、被疑者等の人たちは、始めその必要性を感じないで捨ててしまうから、その次につまずいたときに頼れるよう、電話の仕方を教えるのがよいと思うのである。各位にも被疑者等に勤めるに先立って是非一度ご自身がお電話され、関係者としてオープン・ミーティングに参加されることをお勧めする。

(財団法人日本刑事政策研究会「罪と罰」編集部の承認を得て、平成18年12月発刊第44巻1号(通巻173号)より転載)

地域の分かち合い

～北海道地域～

AAのサービスとは？

サービスに関連して思いつくまま私的な雑感を書かせてもらいます。

私のホームグループのミーティング会場は2箇所小さな教会と大きな教会があります。私が10年程前にAAに通い始めた冬、雪の日にその小さな教会に行くと教会の前の駐車場でいつも「雪カキ」を行っている目の悪い仲間がいました。彼は私のホームグループのメンバーではなく施設から通って来ていました。彼はミーティングでは寡黙で、多分2分以上自分の話をしたことがなかったと思います。その後、暫くして彼は亡くなりました。AAでサービスと聞くと雪の日に会場の駐車場で「雪カキ」をしていたその仲間をふと思い出すことがあります。

私が始めてサービスに関わったのは、ホームグループの司会を任された時だと思えます。9年程前になると思えます。その期間に一度も私は会場でのお湯沸かしやセッティングを行えませんでした。時としてホームグループ以外のメンバーが会場の設定を行い、その後ホームグループメンバーがやってくれることもありましたが。司会の私が会場に着くと、お湯もコーヒークップも看板もセットされ、冬はストーブが部屋を暖めていました。会場の設定はいつも配慮あるメンバーに私は助けられました。

代議員を3年やりました。通常は2年のようですが、私もグループも気付かず3年目もやっていました。当時、ホームグループのビジネスミーティングは30分以内で終了していました。地区委員会には随分タクシーで駆けつけましたがよく遅れたと思えます。当時のことを詳しくは思い出さずにはないですが、地区主催のミーティングや地区にあるK病院へのメッセージに参加しました。メッセージは地区のグループの輪番で行いましたが、私が代議員の期間にK病院からAAにつながった仲間はいませんでした。その後、K病院はアルコール患者の入院病棟がなくなり、アルコール患者は外来通院だけになりK病院へのAAメッセージは中止されました。

代議員も終わり地域の会計を2年行いました。初めて帳簿をつけました。簿記というのは会計知識としてありましたが、初めて会計本に書かれている元帳への反対記入の意味がわかりました。各グループの献金などを帳簿に転記するのが面倒なのと1円、5円、10円を数えるのが面倒でした。現金額が足りなくて合わないときは、

自分で献金すればよいと割り切っていたので、その点は悩みませんでした。地域会計の各月集計データがはいったパソコンにWindows・updateを行い失敗し、CDからの再インストールとなり地域集計前にそのデータを失いました。少し痛い思い出です。<つつく……退避しとけ>

地域の会計が終わりセントラルオフィスの委員を誘われ今年で3年目となります。気付けば、代議員も含めば8年間続けてサービスに参加していたこととなりますが、この5年間、月1回程度の拘束です。ホームグループの役割はこの5年何も行っていない。つまり大したことはしていません。今は「自分も与えられたのだから少しお返しができるくらい」の気持ちです。サービスに参加し、自分の提案に反発をもらうことで自分の独善性に関しても見直す契機にもなりました。

アメリカのAAには関心しない点と関心する点があります。関心する点はサービスへの個人主義的な責任感を持つ人達がいる点です。「私やらなくて良い時はすべて他人にまかせ口出しはしないが、私がやると決めた時はやる」の精神です。この感じは青森の米軍三沢基地でのAAイベントに何回か参加することで感じました。2001年のテロ以前は米軍基地内の小さなロッジ風の建物でイベントができました。宿泊も基地内のAAハウスに泊まることも可能でした。イベント2日目の早朝、私がそのロッジに隣接した公衆トイレに用を足しに行った時、最もソーバーの長い男性メンバーが一人、モップでトイレ掃除していました。別れ際に彼は私に言いました。「Thank you for being here」(ここにきてくれてありがとう)。ミーティング中はその輪に入らずファッション雑誌を読んでいたサングラスに金髪の女性がいました。彼女はミーティング最後の祈りの輪だけに参加しました。メンバーの家に泊まらせてもらい、彼女がアル中(夫)の妻であることが分かりました。翌年のAAイベントに来てみると彼女はその年のイベントでは司会進行のリーダー役でした。彼女は口出ししないAAメンバーでした。「やらなくて良い時は任せるが、やるべき時は一歩前に出てコミットする」そんな感じを彼らから感じました。

私にAAを薦めたためた精神科医は私が10年前にAAに通い出して2、3ヶ月経ったころ、通院してきた私に質問しました。「AAの弱さはなんだと思えますか。」AAに通い初めた私は分からないので答えませんでした。「20年間、AAミーティングに病院からアル中を送り続けています。2、3年AAに通ううちに段々と離れていく人が多いのは、一般的な社会人や普通の家庭にいるアル中がAAで分かち合いはできても希望が見えなく感じてくるからだと思えます。」と医師は言いました。それから10年過ぎ、現在もその病院はAAにアル中を送り続けています。AAの中で何度も話されてきた「引き付ける魅力」、前文に書かれている「経験と力と希望」、サービスがそれらを伝える助けになるのかと考えることがあります。時として弱気になることもありますが、自分が自分以外のものに生かされているとしたら、それを支援するのは何も特別なことではなく、ごく普通のことだと思えます。

サービスはそのようなことだと私は考えます。サービスと言うと少し話が硬直する時がありますが、ミーティングを成立させる全てのものが最も基本的なサービスであると思っています。僅か1万人にも満たない組織でサービスの小難しい話の優先順位は低い筈です。AAの希望が多くアル中に点るようになれば……と思えます。

AAには共に生きてゆく喜びのようなものがあると思えます。2005年のトロントの70周年前夜祭でスレンダーでナイスボディの黒人女性と小柄でパンチのある白人女性のツインボーカルのバンドがアレサ・フランクリンの「chain of fool」(馬鹿の輪)を歌い、ステージ下では夏の汗と風船が飛び交う中、みんなの気持ちが高潮の輪になったように感じました。アル中の阿波踊りのような感じです。

「同じあほ(アル中)なら踊らなそん」生きてゆく喜びがみなぎる時間のように感じました。確かに特別なイベントから力を貰えます。しかしお祭りには必ず終わりが来ます。日常でのミーティングやサービスをを行う中で「アル中が共に生きてゆく喜びや希望」を感じることができれば、それこそが一番素晴らしいことだと思います。

はまなすG タッチ

短かった6年余、楽しかったJSO生活

出版局 城間勇

この2月でJSOを退職いたします。みなさん、お世話になりました。

私が勤務したのは2000年11月から2007年2月までの6年4か月です。担当は出版局で、AAの本、パンフレット作りの全般をやってきました。まったくの素人からスタートしましたから、最初はいろいろ苦労し、失敗もしました(ご迷惑をかけてしまった方にここでお詫びします)。でも、元来がこういう仕事向きの人間だったようで、パソコン操作、原稿集め、翻訳、編集、校正、そして印刷会社との打ち合わせなどのスキルが少しずつ身につくにつれ、楽しんで仕事ができるようになりました。モノを作る仕事ですから、出来上がりが目に見え、すぐやりがいも感じました。このような機会が与えられたことに対して、心から感謝しております。ありがとうございました。

・ボランティアのみなさん、ありがとうございました。

振り返って忘れられないのは、多数の方が出版局の仕事を手伝ってくれたことです。AAメンバーだけでなく、ノンアルコールのAAの友人からも助けていただきました。その数はこの6年余をとおして見れば、おそらく50名ほどになり、特に翻訳、リライト、校正の分野でのみなさんの無償の献身は忘れることができません。この期間に、ほとんどの出版物が改訂できたのも、「ビッグブック」のハードカバー版、『ドクター・ボブと素敵な仲間たち』『AAサービスマニュアル』ほか数点を新たに発行できたのも、すべてボランティアのみなさんが助けてくれたからでした。ありがとうございました。どうぞこれからも、出版局へのお力添えをお願いします。

・出版担当職員として

出版担当として振り返ると、大きな反省点が一つあります。それは、パンフレットのいくつかを発行できなかったことです。これらのパンフレットは、出版局が作った出版計画に盛り込み、評議会で発行が承認されたものでした。このため、結果としてAAグループ全体の良心の結実である評議会勧告決議の権威を損ねてしまいました。主な原因は、私の背伸びしすぎです。力量に見合った出版計画を立てるべきだったと反省しております。

・JSO職員として

職員としてどうだったかと振り返ると、まあ及第点は与えられるかなと考えています。実を言うとJSOって変なところだなあというのが、雇用される前に私が抱いていた印象でした。電話をかけても、返ってくるのはボソボソとした声で、なんとなくつっけんどん。これでサービスオフィスなのかと疑問も持っていました。働き始めて私がまず努力したことは、電話の応対でした。電話を受けたときは大きな声で「ハイ！ JSOです」とはっきり言うようにしました。こういうことから始めるべきだと考えたのです。6年過ぎて、電話応対はとても良くなったと思います。簡単なマニュアルもでき、職員の一人ひとりが適切な応対をしていると感じています。

先週末、今年の評議会が開催されました。私にとって最後の評議会でした。少しだけ迷ったのですが、普段着のまま、ネクタイも持たずに家を出ました。会場に着くと、ある理事から「評議会は会社でいえば株主総会なのよ！ 雇われているJSO職員がそんな格好じゃあ駄目！」と強く言われてしまいました。まったくそのとおりで、「ハイ」と答えるしかありませんでした。野崎さんが心配してくれ、余分に持っていたネクタイを貸してくれました。私は、初日は柄物のシャツにそのネクタイを着用し、退職のあいさつを「フォーマルな服装(?)で行うことができました。

一事が万事で、JSO職員としての私の日常はずっとこんなふうでした。世間の常識に耳を傾けることが少なく、自分の常識だけを大事にしてきました。これからは、もっとバランスを大切にしなければと反省しております。

・常任理事会、評議会構成メンバーとして

評議会での退任のあいさつでも話させていただきましたが、ゼネラルサービスに関わる一メンバーとしての私の意見は、少数派に属するほうが多かったように思います。そしてこの場を借りて申し上げたいことの一つは、日本のAAでは概念5の少数意見、アピール権が基本的に保証されているということです。そのおかげで、私は「少数派の悲哀」をあまり感じることなく、この6年余を過ごさせていただきました。また、今年度の評議会でもようやく、試行中の評議会憲章から「出版局には表決権を与えない」という趣旨の文言が削除されたこともうれしく思っています。

・終わりに

「日本のAAは・・・」という言葉は極力使わないようにしているのですが、終わりにあたって一つだけ言わせてください。私は、日本のAAのこれからの課題の一つは、ビル・Wたちが私たちに手渡してくれたスポンサーシップとビッグブックという特別な贈り物をもっと真剣に学び、活用していくことだと思っています。

この30年を振り返ったとき、何万人ものアルコールが日本のAAにたどり着きながら、AAに留まり続けられた人は非常に少数だったという事実を目を向けないわけにはいきません。その主な原因は、スポンサーシップとビッグブックが十分に活用されてこなかったからだというのが私の意見です。アルコールであれば、AAミーティングに参加して、酒をやめるだけではまったく不十分です。それはスリッパの危険を残し、スリッパは死につながります。私の経験はそうでした。そして私以外にも、たくさんの人がスリッパをするのを見てきました。

これからは、AAに対する社会からの期待と要求がますます高まると思っています。矯正施設関連をはじめ広報活動全体が活発になり、どの集まりも成功しています。これは大いに結構なことです。多くのアルコールがAAにやってくる時代が来ようとしています。その時、AAの特別な贈り物である「スポンサーシップ」「12のステップ」「ビッグブック」が提供できなければ、この30年と同じ事を繰り返すことになりかねません。

今回の評議会では私は、これまでのやり方の良い部分を大切にしながら、さらに役に立つ情報を手に入れ、学び、実践していこうという息吹を感じることができました。評議会を支える書記などのボランティアのメンバーやオブザーバーにも、そのような力が働いているように見えました。

これからもハイヤーパワーの働きを信じ、一人のメンバーとして私も生きていきたいと願っています。

みなさん、ありがとうございました。